

学位論文題名

ジョン・アダムズの中央政府論

学位論文内容の要旨

本論文は、「アメリカ合衆国建国の父たち」に数えられる第二代大統領ジョン・アダムズの政治思想と政治行動の分析を通して、アメリカ連邦政府形成の思想的基礎を明らかにすることを目的とする。

1783年に正式に独立したアメリカの人々にとって、連邦政府の存在は何一つ自明ではなかった。もともとイギリス帝国の辺境に位置していた13邦の北米植民地の人々がもっていた政治的経験は、イギリス国王による統合とイギリス議会(British Parliament)による「専制」、そして160年の歴史を有する各邦それぞれの自治政府の伝統であった。それゆえ、「革命」によってイギリス国王とイギリス議会という統合における権威と権力を放逐したアメリカ諸邦の人々にとって、その後自分たちを統合する政府を構成するという事は、革命の原則に反する上に、そもそも北米植民地における政治的伝統にも存在しない経験であった。

アダムズは、独立戦争に勝利したアメリカ人が初めて連邦政府という統合機関、すなわちアメリカ諸邦を統合する「中央政府」を形成するにあたって、その政府の正統性を歴史から論証し、その構成をヨーロッパの伝統とアメリカの経験から抽出した。そして、最後には大統領としてその政府の運営を通して確立の一端を担った。

アダムズの「中央政府論」とは、端的にいえば、「アメリカというネーションをいかに統治するべきか」という問題にたいする一つの回答であり、この回答こそが連邦政府という存在に正統性を与えたのである。

以上の目的から、本論文は以下に示す六章の構成に従って考察を進める。

まず、序章においては、先行研究におけるアダムズ論の代表的な文献を中心に、これまでのアダムズ研究の方法を分析し、本論文における研究方法を提示する。具体的には、アメリカ革命を大きく「抵抗」・「革命」・「建国」の各段階に分け、各政治史の段階におけるアダムズの政治思想を内在的に理解することの意義を提起する。

第一章においては、政府理論それ自体を18世紀の思想の思想潮流の一つと位置付け、そのなかで成長したアダムズの思想形成期を検討することによって、後の彼の政治思想の沿革を検討する。また、本章には、J・G・A・ポコックのアメリカ革命論にたいする批判が込められている。すなわち、彼自身の戦略性にもとづく極端なロック排除の傾向にアメリカ建国史家たちがあまりに安易に同調してきたことに違和感をもつからである。シヴィック・ヒューマニズムの伝統を指摘する意味はもちろん重要であるが、伝統が革命に結びつくには、伝統的観点とはことなる思想が必要なのである。それゆえ、ポコックの文脈に乗らずに、政治的ニュートン主義の文脈で、古典的なロック、モンテスキューの意味を再評価する。これは同時に、建国期アメリカ内在的な視点を再評価する試みでもある。

第二章においては、北米植民地人にとって最初の「政府」との係わり合いをイギリスへの抵抗の文脈から検討する。彼らは、まず抵抗を通して、英国国制を理解し、自

らをアイデンティファイすることを覚えたといつてよい。この抵抗に正統性を与えた、アダムズの主張を英国との帝国論争を中心に検討する。

第三章では、抵抗が革命に移行する過程を検討する。抵抗の段階においては、北米植民地人は、自らをイギリス人と認識していたが、革命においては、自らをアメリカ人と理解しなければならなくなる。これはつまり、それまで依存してきた政府を放棄し、自分たち自身が政府をもたなければならなくなることを意味する。しかし、これには正統性という重大な問題がある。この共和政におけるレジティマシーの問題にたいしてアダムズがいかなる正統化を与えたのかを検討する。

第四章においては、独立国家アメリカが、政府を設立するという新しい試みを、古典的基礎で正統化する過程をアダムズの『アメリカ諸邦憲法擁護論』を中心に検討する。アメリカの独立が、「革命」とされる理由はまさに国王と貴族を統治部門から放逐したためであるが、封建制の伝統をもたないアメリカが、いかにして国王と貴族が担ってきた役割を補完すべきか、というのがアダムズの政治思想の中核となる。すなわち、国王と貴族という革命の原則における敵をいかにして大統領制、上院を有する二院制によって制度化したかが検討すべき対象となる。これは同時に大統領と上院という、主権と連邦制の担い手を明らかにすることにつながる。

第五章では、合衆国憲法において定めた枠組みをアダムズが運用し制度化する過程を、アダムズ政権期の象徴的な業績である、米仏同盟解消交渉を中心に検討する。カリスマ的存在であった初代大統領ジョージ・ワシントンは、極めて不安定な建国当初のアメリカから革命の原則と行政権力とのあいだの緊張を8年間回避させる役割をになった。これにたいして、アダムズ政権は、カリスマによらない制度としての行政権力を確立する契機となった。それゆえ、アダムズ政権はまた、大統領制とは何かを理解するためのテスト・ケースとなったのである。

第六章では、アダムズとトマス・ジェファソン、アレクザンダー・ハミルトンらとの関係を通して、中央政府がコンセンサスを形成した象徴的存在として、政党政治が生まれたことを明らかにする。つまり、党派抗争から政党政治に移行するためには、政権を争う対象である、中央政府にたいするコンセンサスがなければならない。つまりアメリカ政治では、この時期に国家の分裂につながる党派抗争から、国家の統合力を活性化する政党政治への移行がなされたのである。この政党政治の最初の事例が、アダムズとジェファソンのあいだで争われた1800年の選挙であり、この選挙によって、流血なしに政治権力が移行したことこそ、中央政府成立を示す契機となった。それゆえ、本章においては、そのアダムズとジェファソンの人間観、政治観、政府観をめぐる対話、および1800年の選挙にいたるまでのアメリカ政治の動向を検討し、アメリカにおける政党政治の育成過程を検討する。

最後に、以上の考察を踏まえて、今日のアメリカ政治研究を発展させる上での、アダムズ研究の意義を提起する。すなわち、これまでアダムズ研究があまり活発ではなかったことによって、見えなかった事象を明らかにし、アダムズの政治思想とそのアメリカ政治史における今日的な意味を明らかにする。

学位論文審査の要旨

主査 教授 古矢 旬
副査 教授 田口 晃
副査 教授 松浦 正孝

学位論文題名

ジョン・アダムズの中央政府論

(論文の要旨)

本論文は、アメリカ合衆国「建国の父祖たち」の一人であるジョン・アダムズの政治思想と政治行動の分析をとおして、アメリカ連邦国家の思想史的基盤とその現実の形成、確立の過程の解明をめざすものである。

ジョン・アダムズは、アメリカ独立革命の有力な指導者であり、建国後にはジョージ・ワシントンのあとを襲って第二代大統領となった人物である。にもかかわらず、アダムズ思想も治績も初期アメリカ政治史の中で十分に検討されてこなかった。現在まで、アダムズは、ジェファソンとハミルトンとに象徴される建国期の政党対立の二極的枠組みの中で、十分な指導力を発揮しえず、守旧的な立場に終始した「保守主義者」としてイメージされてきたといえる。本論文は、こうした通説的なアダムズ理解に挑戦し、根本的再考をうながしている。

その際、最初に想起される課題は、「革命指導者」という初期アダムズのイメージと、「保守主義者」という後年定着したアダムズのイメージとの齟齬をどう統合的に理解するかという点にある。本論文は、この齟齬を安易に、前期アダムズから後期アダムズへの思想的「転向」の結果とみなすことなく、革命期から建国期にわたるより広範な政治状況、思想状況の変動という歴史的文脈の中にアダムズ思想を定位することによって理解しようと努めている。このアプローチによって、アダムズにおける「革命」とは、イギリスへの「抵抗」を通して、しだいに「世俗政府 (civil government)」をヨーロッパ政治思想史の背景から引きはがし、アメリカ独自の社会的、政治的状況において構想し、構築しなおす企てであったこと、そして「建国」とは、それ以前のアメリカには存在しなかった「中央政府 (national government)」の構築、そしてその正当化の企図であったこと、つまりはアダムズにおける「革命」と「建国」とが連続のうちに捉えうるものが明らかにされる。

第一章では、初期のアダムズ思想が、18世紀西欧政治思想の脈絡に位置づけられ理解される。アダムズ思想を、「政治的ニュートン主義」の文脈から読み解くことにより、ここでは、過去30年間、アメリカ革命史理解のいわばパラダイムとみなされてきた「共和主義学派」の所説からの脱却が図られている。ついで第二章では、イギリス政府とアメリカ植民

地との対立の渦中において、アダムズが、アメリカの「抵抗」をまずはイギリス国制の枠内でいかに正当化しえたのか、ついで彼のイギリス帝国論がいかにアメリカ独自の政治的アイデンティティの形成に結びついていたのかが検討される。第三章では、アメリカがイギリス帝国への「抵抗」から「革命」（すなわち帝国離脱）の局面へと転回してゆく時に、「共和政体」の構築とその正当化に向けてアダムズが果たした思想史的貢献が明らかにされる。それを受けて第四章では、アダムズの『アメリカ諸邦憲法擁護論』に依拠して、彼がどのように「国王と貴族」を欠いた共和政を永続的な安定的統治システムとして構想したかという問題が主題となる。

一転して、第五章は、カリスマ的指導者ワシントンの跡を襲ったアダムズが、「カリスマなき大統領」であったが故に、行政権力を制度として確立し、連邦憲法体制を制度的に定着させ安定化させていった過程が、その具体的な政治指導、外交指導をとおして、政治的に明らかにされる。第六章は、アダムズと彼を引き継いで第三代大統領に就任するジェファソンとの間の「党派対立」のあり方の内に、憲法外的な制度である「政党」の成立と、政治権力の平和的交替を可能にする政党政治の萌芽を見いだしてゆく。彼らの間の平和裡な政権交代こそが、まさにアダムズの構想した共和政的中央政府が、国民的コンセンサスに支えられて制度化されたことを示す事件であったのである。

（評価の要旨）

本論文は、申請者が三年前に本研究科に提出した修士論文「ジョン・アダムズの混合政体論」を出発点として、ジョン・アダムズの政治思想を、米欧にわたるより広い視野と、より長い時間的スパンにおいて再検討しようとするものである。「忘れられた建国の父祖」アダムズに、わが国で最初の本格的な政治思想史のかつ政治史的検討をくわえた本論文は、以下の諸点からみて、学位申請論文としてきわめて優れていると評価できる。

①一次資料の博搜に基づき、これまでともすれば一貫した政治思想家としては理解されてこなかったジョン・アダムズが、初期アメリカにおける政治・外交問題を熟知し、ヨーロッパ政治との異同を熟慮し、首尾一貫した独自のアメリカ政治論の創始者であったことを明らかにしている。

②従来ともすれば凡庸と目されていたアダムズを、思想、革命運動、政治指導といった領野を自在に横断しつつ、一貫性を失わなかった「工作者」として再評価している。アダムズをとおして、初期アメリカの政治史的空間の思想的背景と現実政治の変容過程がいまきと再現されている。換言するならば、政治史と政治思想史というジャンルの結合に、成功している。

③既存の学界動向をバランス良くふまえているために、いたずらに解釈の斬新さを求めて論旨が破綻する愚を回避している。

④アダムズ関係文書を広く渉猟し、それらを正確な英文読解力をもって読みこなし結果として、実証性のレベルが高い。

⑤修士論文で萌芽的に見いだした問題群を、鮮明な歴史学的課題へと組み替えつつ、モノグラフとして展開してゆくことに成功している。そこに、歴史学的構想力と研究者として

の持続力が示されている。

ただし、以下の点では、なお改善の余地がある。

- ①課題の性格に照らして、アメリカ憲法史上の含意に触れるところが少ない。
- ②18世紀ヨーロッパ思想史との関連箇所では、一次資料への言及に欠けるきらいがある。
- ③アダムズ思想のアメリカ以外への波及の有無、他の同型的思想との比較に欠ける。

申請者の今後の研究に委ねられるべきこれらの課題は残されているものの、本論文は、総合的にみて、博士論文の水準を十分に満たしているものと評価される。